

新里村文化財調査報告書第3集

刈屋道の角遺跡発掘調査報告書

新里村教育委員会
(岩手県)

序

新里村内には、縄文時代の遺跡をはじめとする埋蔵文化財包蔵地が数多くあり、約30カ所に及ぶ遺跡が岩手県遺跡基本台帳に登録されています。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に残していくことは私達に課せられた責務であります。

しかし、本村の遺跡のほとんどは未調査であり、遺跡分布、内容等も未整備であるのが現状です。

一方、村全体の96%が山林原野で占められている本村では、住民生活の向上を図るうえで道路交通網の整備・生活環境の整備等の地域開発は、村民にとって重要な施策でもあります。このような状況の中にあって、貴重な文化遺産の保護、保存と開発との調和を図り、豊かな地域社会を築いていくことは、最も重要な課題となっています。

開発事業によってやむをえず消滅する遺跡は発掘調査を行い、記録保存することは、埋蔵文化財に対して理解を深める上で、非常に意義深いものとするべきであります。

本報告書は、農業集落道整備事業に伴う刈屋道の角遺跡の調査結果をまとめたものであります。

調査の結果、土坑、配石遺構の他に多量の土器片が出土し、縄文時代の遺跡であることが確認され、また本村において初めて奈良時代の遺物も出土するなど、貴重な資料を得ることができました。

調査を実施するに際しては、発掘調査及び報告書作成にご協力ご指導いただきました佐々木信一先生（新里村立刈屋小学校教諭）、岩手県教育委員会をはじめとし関係の方々に衷心より感謝申し上げます。

最後に、本書が文化財保護の資料として活用され、郷土の文化財や研究のために多少なりとも寄与でき得ることを願うものであります。

平成9年3月

新里村教育委員会

教育長 山 崎 福 利

例 言

1. 本報告書は平成8年度に実施した新里村刈屋に所在する刈屋道の角遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 発掘調査の主体は新里村教育委員会である。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の登録番号は次の通りである。
刈屋道の角遺跡 L G 30-0075
4. 発掘調査期間、発掘調査面積は次の通りである。
発掘調査期間 平成8年7月27日～8月9日
発掘調査面積 240㎡
5. 発掘調査には、佐々木信一（新里村立刈屋小学校教諭）が担当としてあたり、新里村教育委員会の武田章がこれを総括した。
6. 室内整理・報告書の執筆は佐々木信一が行った。
7. 本遺跡から出土した遺物及び調査資料は、新里村教育委員会が保管している。

目 次

序 文

例 言

本 文

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	1
1. 遺跡の位置	1
2. 遺跡の立地と周辺の地形	1
3. 基本層序	2
4. 周辺の遺跡	3
III 野外調査と整理の方法	5
1. 野外調査	5
2. 室内整理	5
IV 検出された遺構と出土遺物	13
1. 土 坑	13
2. 配石遺構	18
3. 焼土遺構	19
4. 出土遺物	20
V まとめ	23

表

第1表 周辺の遺跡一覧表	3
第2表 土坑一覧表	15
第3表 石器一覧表	22

図 版

第1図 土層断面図	2
第2図 周辺の遺跡位置図	4
第3図 スクリーントーン凡例	6
第4図 調査区域図	7
第5図 刈屋道の角遺跡遺構配置図①	9
第6図 刈屋道の角遺跡遺構配置図②	11
第7図 AⅡe0①・②・③土坑、AⅠe9①土坑	14
第8図 AⅠd8①・②土坑、AⅠe8①・②・③・④土坑	15
第9図 AⅠe8⑤土坑、AⅠe9②・③・④・⑤土坑、AⅡe0④・⑤・⑥土坑	16
第10図 AⅡe0⑦・⑧・⑨・⑩土坑	17

第11図	A I e 9 配石遺構	18
第12図	A I e 8 焼土遺構	19

写真図版

図版 1	遺跡近景・基本土層	27
図版 2	配石遺構全景	28
図版 3	グリッド毎配石遺構①	29
図版 4	グリッド毎配石遺構②、A II e 0 ①・②土坑	30
図版 5	A II e 0 ③土坑、A I e 9 ①土坑、A I e 9 ③土坑、 A II e 0 ④・⑤土坑、A I e 9 ⑤土坑、A II e 0 ⑥・⑦・⑨土坑	31
図版 6	A I e 9 配石遺構、A I e 8 焼土遺構、作業風景	32
図版 7	出土遺物(1)	33
図版 8	出土遺物(2)	34
図版 9	出土遺物(3)	35

I 調査に至る経過

新里村では、平成8年度において、集落間のアクセス道として農業集落道松原線整備事業を計画していた。

この道路整備予定地は、周知の遺跡「刈屋道の角遺跡」の場所である。このため、担当の農林課から整備予定地における埋蔵文化財の内容を事前に把握したい旨、当教育委員会に照会があった。

これを受けて、当教育委員会では平成8年5月24日試掘調査を実施した。その結果、トレンチ8本のうち南東の5本において多くの遺物が出土し、また周辺に遺構が存在する可能性もあることから、本格的な発掘調査が必要と判断した。

このため、農林課と協議し、南東部について本調査を実施することとした。平成8年7月4日付け文化庁長官あて発掘調査届けを提出するとともに、県教育委員会文化課に指導を要請し、同年7月27日から発掘調査に着手した。

尚、今回の調査では、調査期間が限定されていたこと、期間を延長して調査を行う場合、発掘調査員の確保が困難であること等の事情から、検出された遺構について十分な調査はできなかった。そこで、遺構をほぼ現状のまま保存しながら道路整備作業を進めるよう農林課と打ち合わせ、調査を終了した。

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

刈屋道の角遺跡は岩手県下閉伊郡新里村にあり、JR東日本岩泉線刈屋駅の東南東約0.6kmに位置する。地形図上では、国土地理院発行の5万分の1地形図「宮古」NJ-54-13-3（盛岡3号）の図幅に含まれ、北緯38度38分、東経141度56分付近に位置する。所在地番は岩手県下閉伊郡新里村大字刈屋第14地割65番地ほかである。

2. 遺跡の立地と周辺の地形

下閉伊郡新里村は盛岡市の東約55km、北上山地の中央部やや東側にあり、北に岩泉町、西に川井村、東に宮古市、南に山田町が隣接している。

主要交通路は、JR東日本岩泉線、国道340号線が南東―北西に走り、JR東日本山田線、国道106号線が東西に走っている。

新里村は、山地に富む地域で、その山地は大部分が標高500m～1,100mで、中でも北西部の堺ノ神岳（1,319m）は最も高く、刈屋川沿いに次第に低くなっている。

村内の主な河川は、村の南部を東流する閉伊川、その支流である刈屋川、二又川、飛沢川、大沢川があり、その他、刈屋川の支流の倉の沢川等がある。特に、刈屋川は堺ノ神岳の東側を源流部としており、段丘を形成しながら南東へ流れ、村南東部の茂市で閉伊川と合流している。

本遺跡の所在する刈屋地区は、刈屋川の形成した段丘上にあり、本遺跡はこの段丘縁部に位置している。標高は96～98m、刈屋川との比高は13～14mである。現況は、道路、荒地である。本遺跡の南側は、国道340号線を挟んで清水野遺跡に接している。

3. 基本層序

本遺跡の基本層序は以下の通りである。尚、土層断面図はグリッドA I e 6で作成したものである。

I層 黒色土 シルト 表土で、遺跡全面を覆う。しまりがあり、粘性もある。小礫を含む。層厚は10～20cmである。

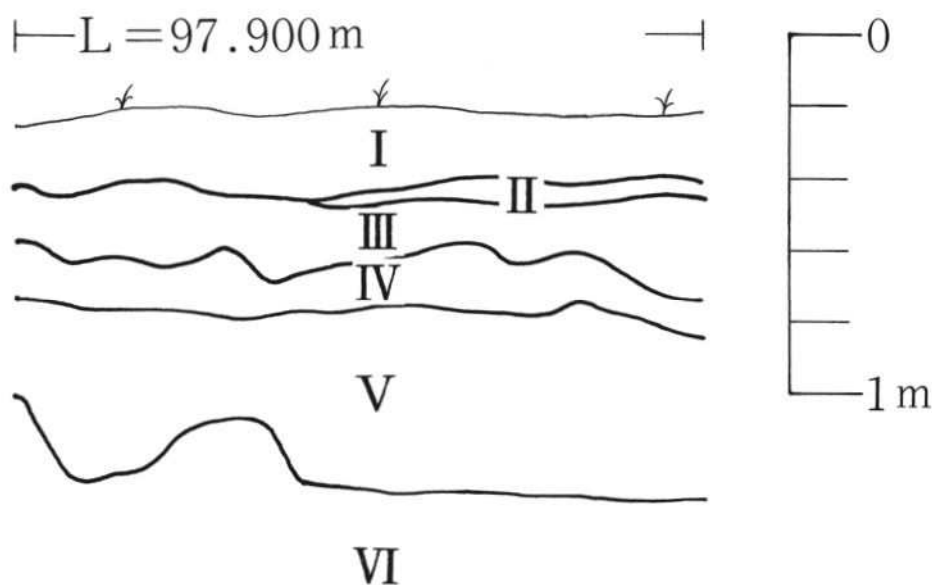
II層 明黄褐色土 粘土質シルト よくしまる。水田造成時の客土。層厚は0～6cmである。

III層 黒色土 シルト よくしまり、粘性もある。小礫を多く含み、中には10cm大の礫も含まれる。遺物を多く含む。本層下部が遺構検出面である。層厚は10～30cmである。

IV層 黒～黒褐色土 シルト ややしみに欠けるが、粘性はある。部分的に焼土粒を含む。層厚は10～20cmである。

V層 黒褐色土 シルト ややしみに欠け、粘性もあまりない。小礫を多く含み、中には40cm大の礫も含む。層厚は40～70cmである。

VI層 褐色土 砂礫層 しまりがなく、粘性もない。礫を多量に含む。層厚は不明である。



第1図 土層断面図

4. 周辺の遺跡

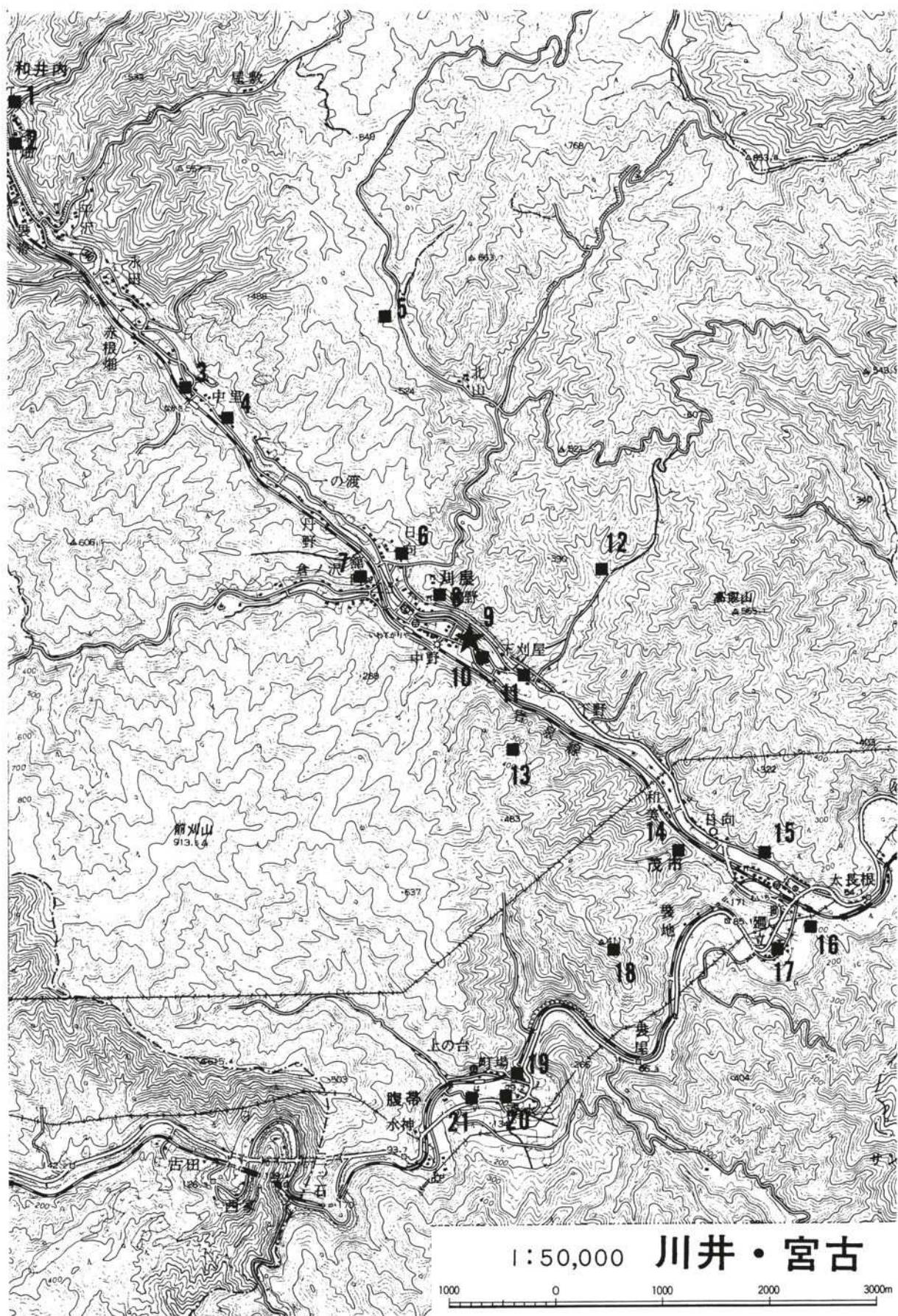
新里村内には現在31カ所の遺跡が登録されている（岩手県教育委員会文化課の遺跡台帳による）。その分布をみると、閉伊川流域とその支流の刈屋川流域に多く分布している。特に、縄文時代と中世の遺跡が大部分である。

新里村内の遺跡については、平成元年と2年に、新里村教育委員会が腹帯環状列石（報告書は腹帯配石遺構群として刊行されている。）の調査をしており、その結果、縄文時代中期末から後期初頭にかけての配石遺構と、それに伴う遺物が発見されている。

その他の遺跡については調査が行われておらず、詳細は不明である。

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺 跡 名	種 別	遺 構 ・ 遺 物
1	和井内東	散布地	縄文土器、弥生土器、剥片、鉄糞
2	和井内釜場	散布地	縄文土器
3	刈屋中里	散布地	縄文土器、剥片
4	刈屋丹野	散布地	縄文土器（中期）
5	北山曲沢	散布地	縄文土器
6	刈屋日向	散布地	縄文土器（晩期）、石鏃、石斧
7	刈屋館（高松館）	城館跡	主郭、二の郭、腰郭、土塁、空堀
8	刈屋古館	城館跡	郭、砦
9	刈屋道の角	散布地	本遺跡
10	清水野	散布地	縄文土器（中期）、炉石
11	下刈屋 A・B	散布地	縄文土器、石鏃、石匙、石斧
12	屋敷沢	城館跡	縄文土器
13	啓多門館	城館跡	主郭、腰郭、空堀
14	茂市古館	城館跡	主郭、腰郭
15	茂市館	城館跡	主郭、空堀、土塁
16	茂市雲南	集落跡	縄文土器、石鏃、石匙、獣骨
17	茂市新墓	散布地	縄文土器、弥生土器
18	のろし場	城館跡	堀、土塁、竪穴
19	腹帯館	城館跡	鎌倉期武具（兜）、三重空堀
20	腹帯環状列石	集落跡	列石
21	腹帯 A	集落跡	土器、石鏃、石匙、石斧



III 野外調査と整理の方法

1. 野外調査

(1) グリッドの設定

調査区域外に基準点1、基準点2をそれぞれ設定した（2点とも南北方向に任意に設定した。）。この2点のうち、基準点1を座標原点とし、原点と基準点2を結ぶ線と、原点を通りこれと直交する線を基準線とした。原点から基準線に平行ないし直交するように40m毎に区切り、大区画とし、大区画を更に4m毎に区切り、小区画とした。

グリッドの名称は、東西方向はアルファベット、南北方向は数字を用い、その組み合わせによった。大グリッド名は大文字のアルファベットと大文字のローマ数字、小グリッド名は大グリッド名を冠した後、小文字のアルファベットと算用数字を用いて、A I a 0のように表した。

(2) 粗掘・遺構検出

調査区域内の雑物除去後、数カ所にトレンチを入れて検出面までの深さや層序の確認をした後、表土の除去は重機で行った。遺構検出面までの土層の除去は人力で行った。検出された遺構には、大グリッド名と小グリッド名を組み合わせ、A I e 9土坑のように命名した。

(3) 遺構の精査・出土遺物の取り上げ

遺構の精査は2分法で行った。精査の各段階で図面の作成や写真撮影等必要な記録をとった。

出土遺物の取り上げは、遺構内のものは遺構名、遺構外のものは小グリッド単位で層位を記入して取り上げた。

(4) 実 測

実測は簡易遣り方測量で行った。実測図は原則として10分の1の縮尺で平面図を作成した。土坑についてのみ20分の1の縮尺で平面図・断面図を作成した。

(5) 写真撮影

写真撮影には、6×7cm判モノクロ1台、35mm判のモノクロとカラー各1台を使用し、遺構の平面・断面を中心に撮影した。

2. 室内整理

(1) 作業手順

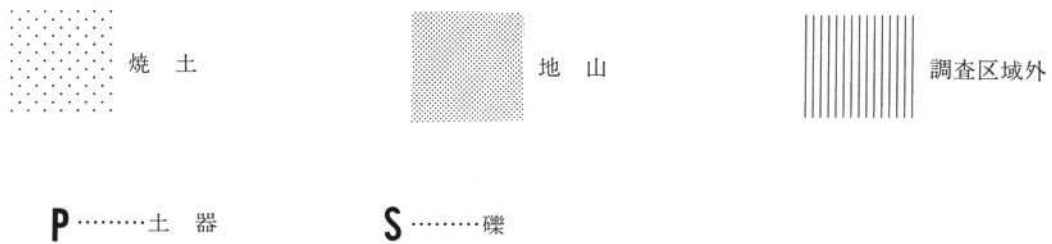
遺構については、現地で作成した実測図の点検、合成、第2原図の作成、トレース、図版作成の順に進めた。遺物については、洗浄、仕分け、登録を行った後、写真撮影、図版作成の順に進めた。（実測図は省略した。）

(2) 遺構図版・遺物図版

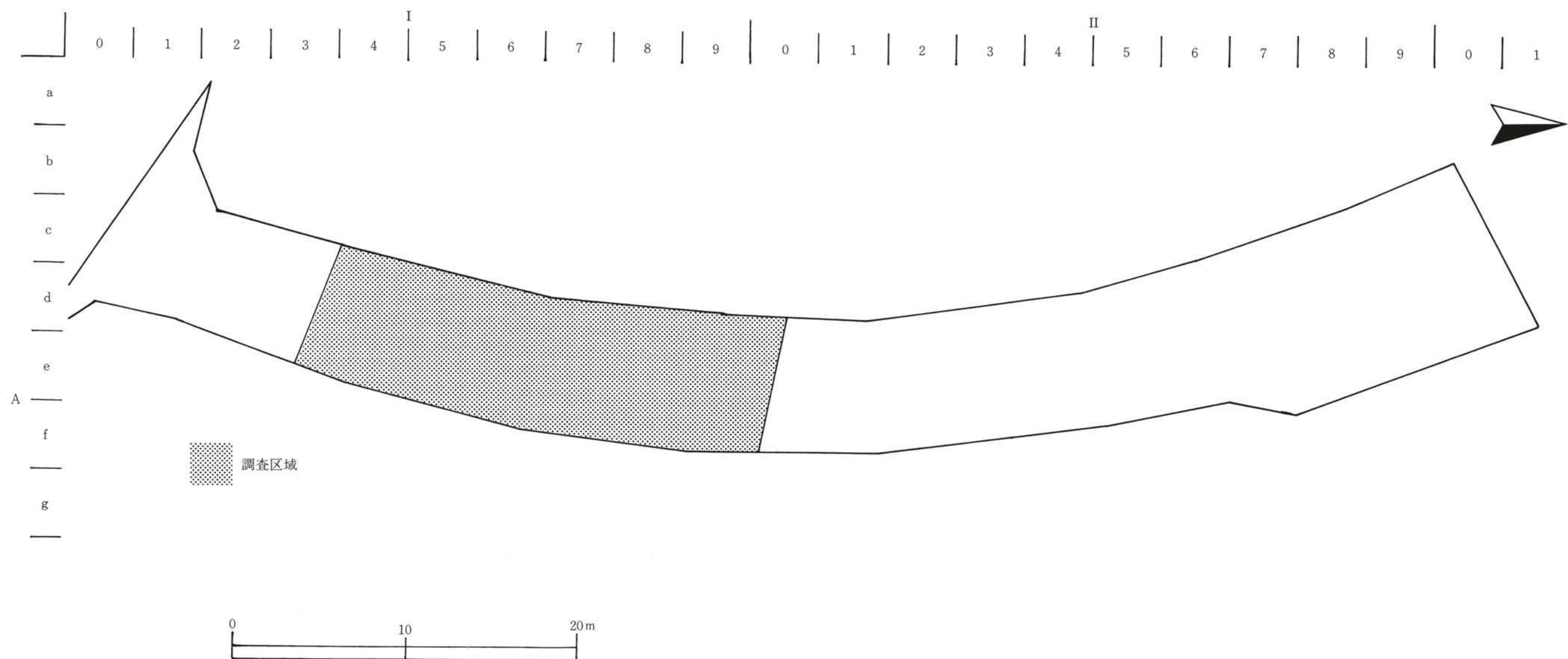
本報告書に掲載した図版や写真の縮尺は、原則として以下の通りであるが、これに該当しないものには縮尺率を別に付してある。

- ・ 遺構図版……………1/30
- ・ 遺構写真……………不定
- ・ 遺物写真……………1/3

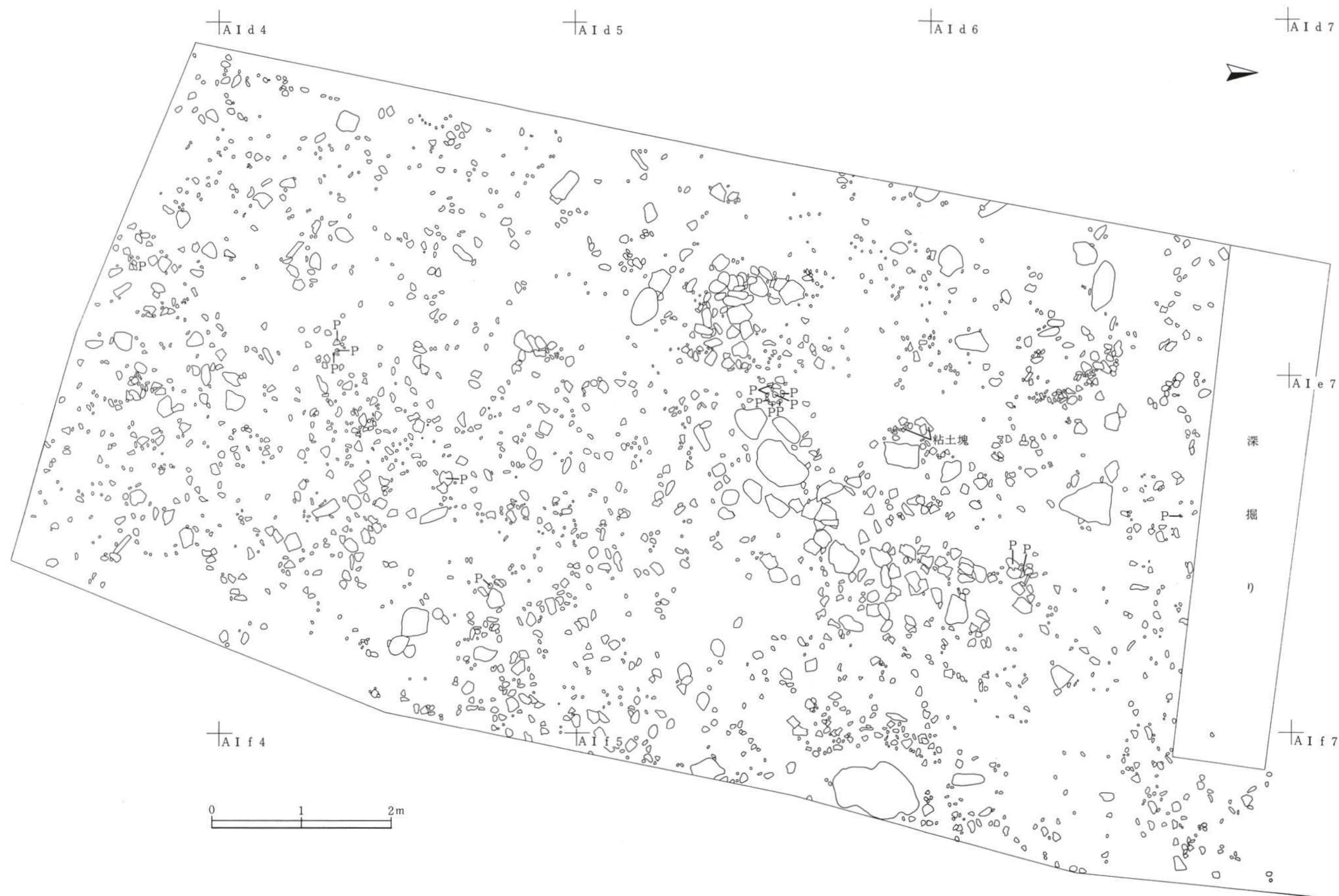
遺構図版を作成するにあたり、使用したスクリーントーンの凡例は次の通りである。



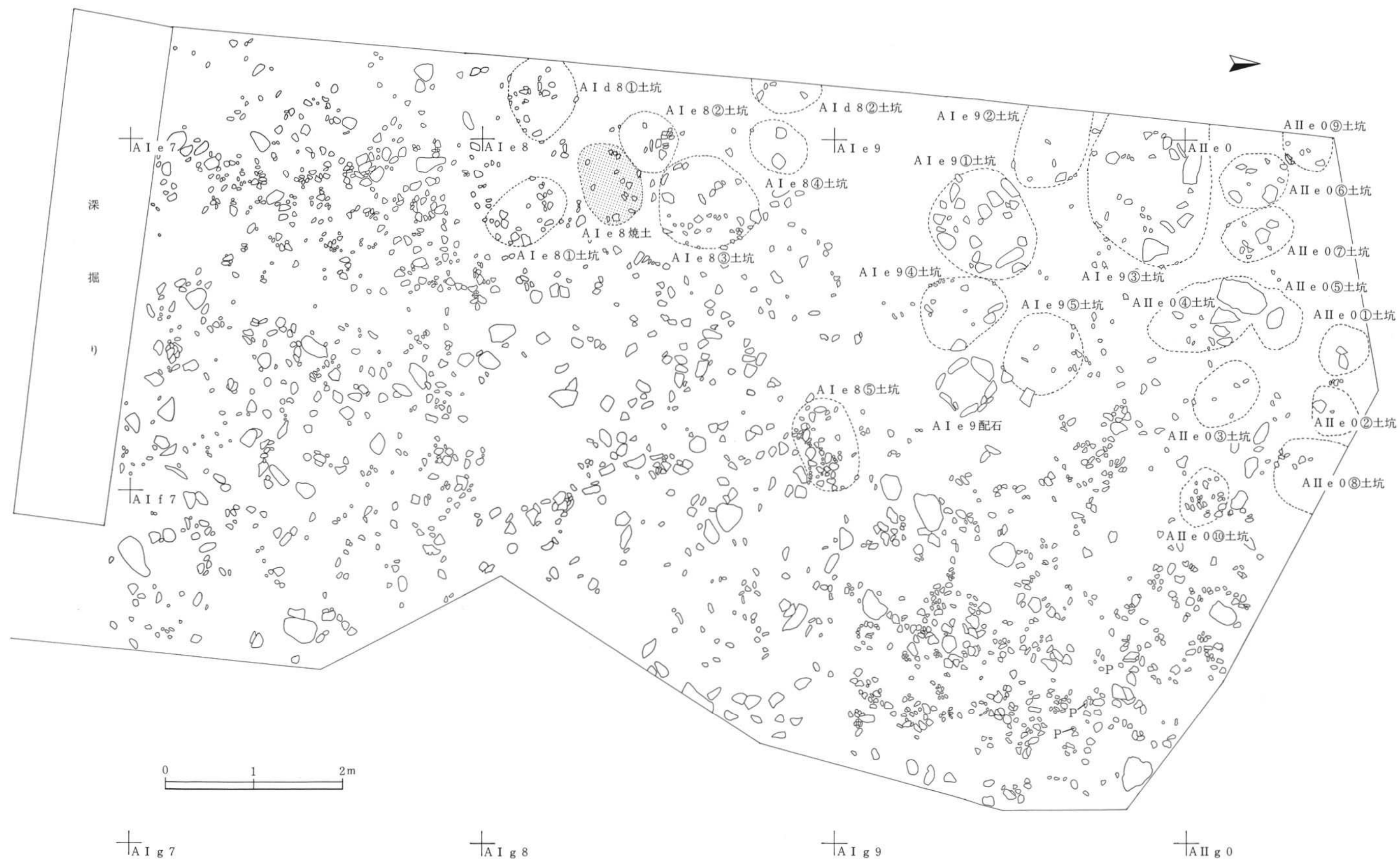
第 3 図 スクリーンパターン凡例



第4図 調査区域図



第5図 刈屋道の角遺跡遺構配置図①



第6図 刈屋道の角遺跡遺構配置図②

Ⅳ 検出された遺構と出土遺物

調査の結果、土坑22基、配石遺構、焼土遺構1基が検出された。また、出土遺物の総量はスーパー等の買物かごで3つ分である。土器は縄文土器、弥生土器、土師器、石器は石鏃、磨製石斧、磨石、凹石などである。

1. 土 坑

石の集合、配置が見られるもののうち、土坑としての輪郭が確認できたもので、調査区域北側から22基検出された。検出面はいずれもⅢ層下部である。精査したものは4基で、そのうち1基は半裁したのみである。

はじめに、精査した4基について記述する。

AⅡe0①土坑（第7図、写真図版4）

調査区域北端グリッドAⅡe0に位置し、AⅡe0②土坑の北約50cmにある。

平面形はほぼ円形で、規模は開口部径55×65cm、底部径20×35cm、深さは最深部で45cmである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり、底部は若干凹凸がある。埋土は2層に分けられ、黒色土が主体である。

出土遺物はない。

AⅡe0②土坑（第7図、写真図版4）

調査区域北端グリッドAⅡe0に位置し、AⅡe0①土坑の南約50cmにある。

開口部は径55×65cmの不整形で、底部は径25×30cmの楕円形である。深さは最深部で36cmである。壁は大きく外傾しながら立ち上がり、底部はほぼ平坦である。埋土は2層に分けられ、黒色土が主体である。1層には礫が多く含まれている。

出土遺物はない。

AⅡe0③土坑

遺構（第7図、写真図版5）

調査区域北端グリッドAⅡe0に位置し、AⅡe0②土坑の東約1mにある。

平面形はほぼ楕円形で、規模は開口部径60×85cm、底部径50×50cm、深さは最深部で30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底部は凹凸がある。埋土は2層に分けられ、上部が黒色土、下部が黒褐色土である。

遺物（写真図版7）

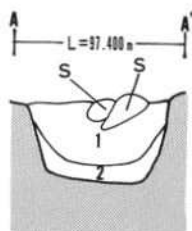
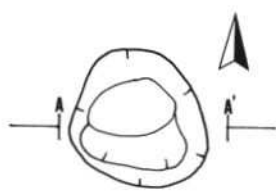
土器1が埋土下部から出土している。深鉢の体部片で、沈線区画された曲線的な磨消縄文が展開されている。大木10式に相当する。

AⅠe9①土坑（第7図、写真図版5）

調査区域北側グリッドAⅠe9に位置し、AⅠe9④土坑に接している。

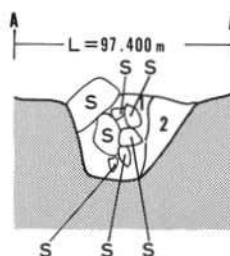
半裁のみで詳細は不明であるが、平面形はほぼ円形で、開口部径110×115cm、深さは65cmと推定される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底部は平坦である。埋土は3層に分けられ、黒色土と黒褐色土が主体である。1層には焼土粒が少量含まれ、3層には礫が多量に含まれている。

出土遺物はない。



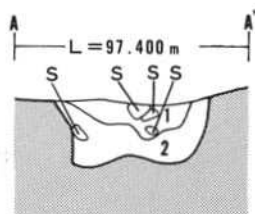
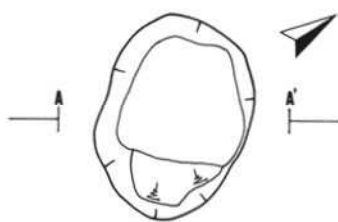
- 1 10Y R2/1 黑色土
2 10Y R2/2 黑褐色土 含礫 (少量)

A II e 0 ①土坑



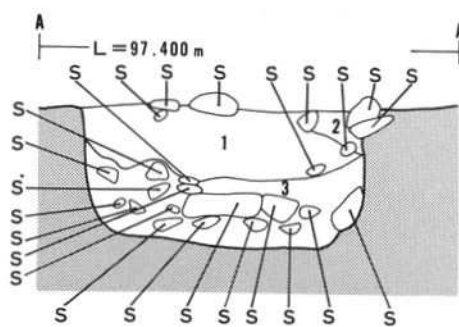
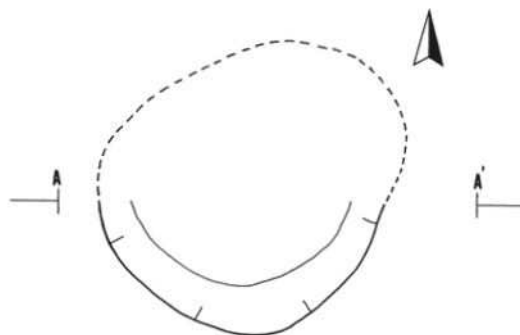
- 1 10Y R2/1 黑色土
2 10Y R2/2 黑褐色土 含礫 (少量)

A II e 0 ②土坑



- 1 10Y R2/1 黑色土
2 10Y R2/2 黑褐色土 含礫 (少量)

A II e 0 ③土坑



- 1 10Y R2/1 黑色土 含燒土粒 (少量)
2 10Y R2/2 黑褐色土 含燒土粒 (少量)
3 10Y R2/2 黑褐色土 含礫 (多量)

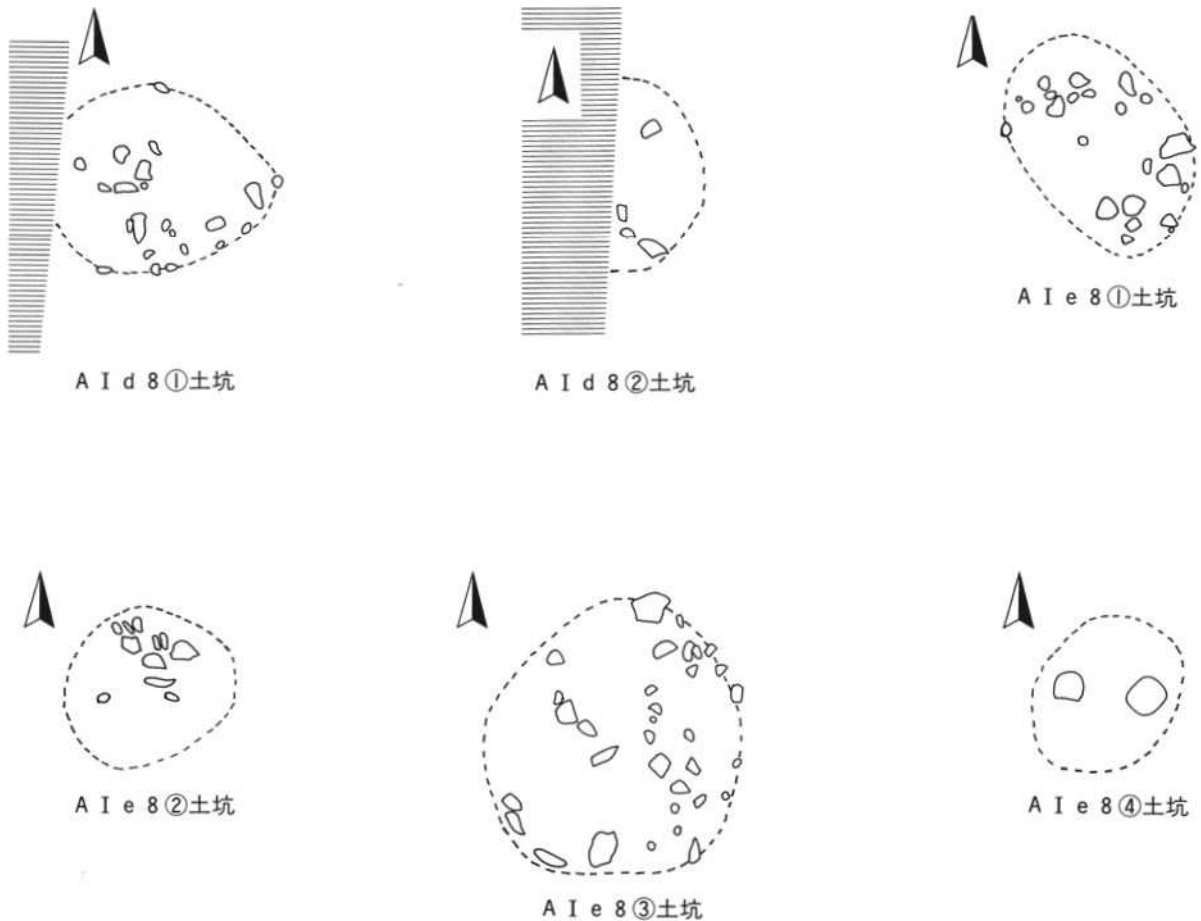
A I e 9 ①土坑

第7圖 A II e 0 ①・②・③土坑、A I e 9 ①土坑

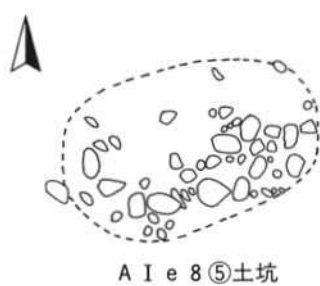
次に、未精査の土坑18基について表にまとめると、次の通りである。

第2表 土坑一覧表

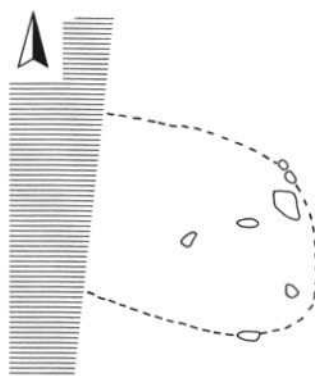
遺構名	検出時平面形	規模 (cm)	遺構名	検出時平面形	規模 (cm)
A I d 8 ①	楕円形	(80×?)	A I e 9 ④	不整形	80×100
A I d 8 ②	楕円形?	(80×?)	A I e 9 ⑤	不整形	85× 90
A I e 8 ①	楕円形	65×100	A II e 0 ④	不整形	(80×?)
A I e 8 ②	ほぼ円形	65× 75	A II e 0 ⑤	不整形	60× 70
A I e 8 ③	ほぼ円形	105×120	A II e 0 ⑥	不整形	65× 80
A I e 8 ④	楕円形	55× 70	A II e 0 ⑦	不整形	50× 80
A I e 8 ⑤	楕円形	65×105	A II e 0 ⑧	不整形	(85×?)
A I e 9 ②	楕円形?	(80×?)	A II e 0 ⑨	不整形	(55×?)
A I e 9 ③	楕円形?	(140×?)	A II e 0 ⑩	不整形	55× 65



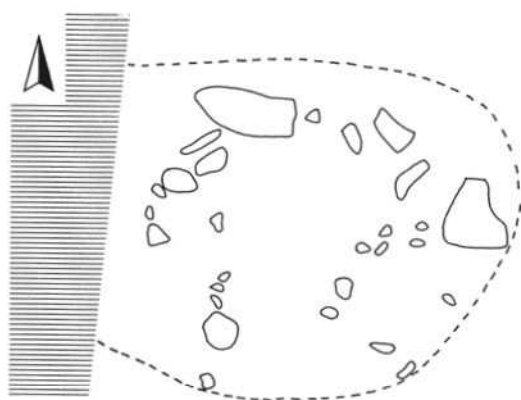
第8図 A I d 8 ①・②土坑、A I e 8 ①・②・③・④土坑



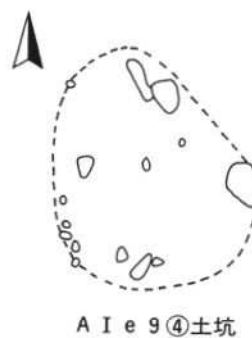
A I e 8 ⑤土坑



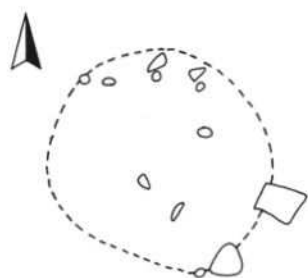
A I e 9 ②土坑



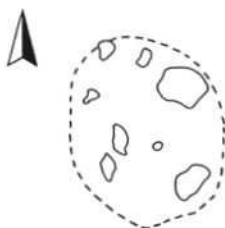
A I e 9 ③土坑



A I e 9 ④土坑



A I e 9 ⑤土坑



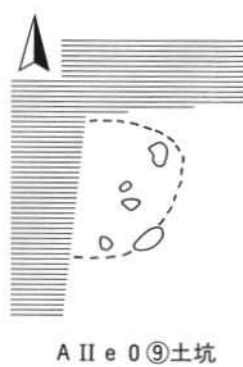
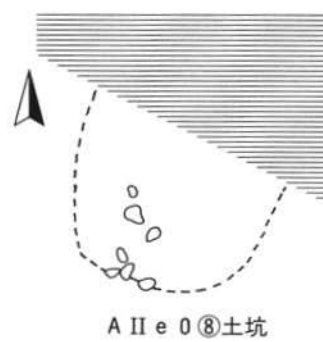
A II e 0 ⑥土坑



A II e 0 ⑤土坑

A II e 0 ④土坑

第9图 A I e 8 ⑤土坑、A I e 9 ②·③·④·⑤土坑、A II e 0 ④·⑤·⑥土坑



第10图 A II e 0 ⑦・⑧・⑨・⑩土坑

2. 配石遺構

石の集合、配置が見られるもののうち、土坑としての輪郭が確認できなかったものを配石遺構とした。規則的な石の配置が見られたものは1基だけである。他については、調査範囲が狭いことから、集合、配置されているそれぞれの石の関係については把握できなかった。

A I e 9 配石遺構

遺構（第11図、写真図版6）

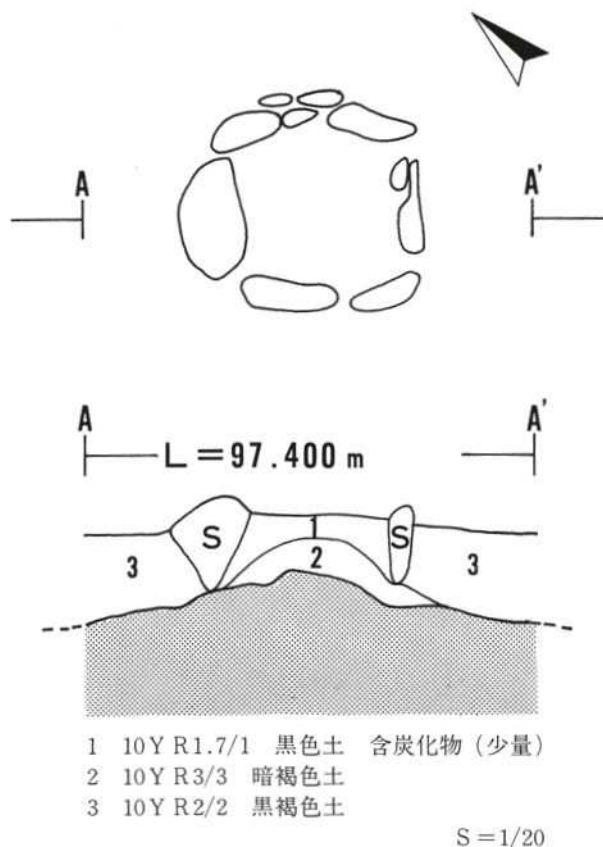
調査区域北側グリッドA I e 9に位置し、A I e 9④土坑の東に、A I e 9⑤土坑の南東に隣接している。

礫が北西側に1個、南西側と南東側に2個、北東側に5個、それぞれ配置され、全体的に正方形の形をしている。配石内部の土層は2つに分けられ、上部が炭化物を含む黒色土、下部が暗褐色土である。

礫の配置状況から炉の可能性も考えられたが、焼土は確認されなかった。

遺物（写真図版7）

黒色土中から石器2が出土している。
無茎石鏃で、基部はU字状に窪んでいる。



第11図 A I e 9 配石遺構

3. 焼土遺構

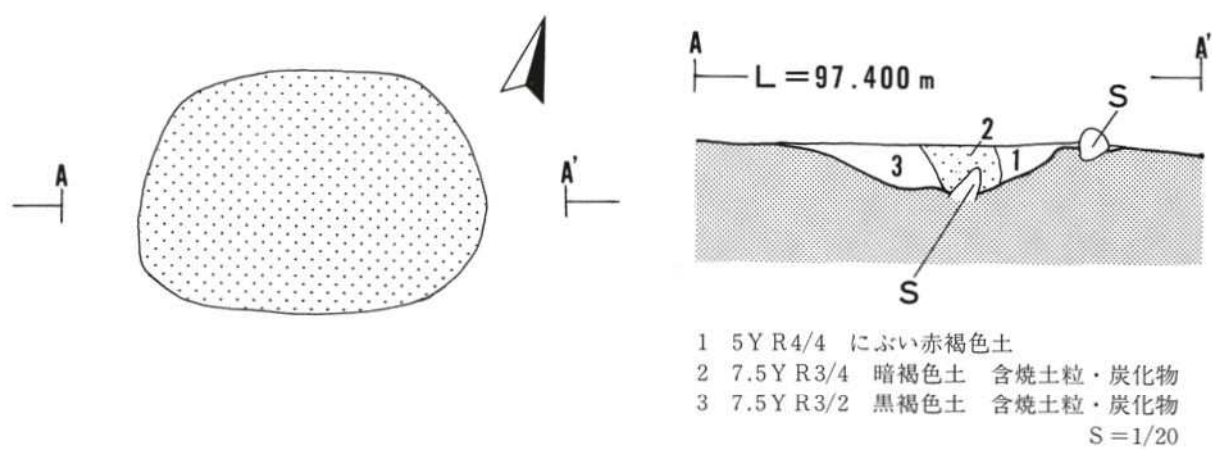
焼土遺構は1基検出された。調査区域中央部での検出である。

A I e 8 焼土（第12図、写真図版6）

調査区域中央部グリッドA I e 8に位置し、A I e 8①、②、③土坑の間にあり、A I e 8①土坑に接している。

焼土は径70×100cmの楕円形に広がっており、焼土の厚さは最大で12cmである。

出土遺物はない。



第12図 A I e 8 焼土遺構

4. 遺構外の出土遺物

遺構外から出土した遺物は縄文土器、弥生土器、土製品、石器、土師器である。調査区域全体から出土している。

(1) 土器

縄文時代中期・後期・晩期の土器、弥生時代の土器、土師器が出土しており、縄文時代中期から後期にかけての土器が多い。記載にあたり、縄文時代中期の土器をⅠ群とし、以下後期の土器をⅡ群、晩期の土器をⅢ群、縄文時代の土器で時期不明のものをⅣ群、弥生時代の土器をⅤ群、古代に属するものをⅥ群に分類した。

Ⅰ群土器（写真図版 7）

縄文時代中期の土器群である。

3、4とも深鉢の体部片である。隆起線文で渦巻文が施されている。いずれも外面が一部煤けており、胎土には径1～5mmの砂礫が含まれている。また、3には金雲母が含まれている。

大木8b式に相当する。

Ⅱ群土器（写真図版 7）

縄文時代後期の土器群である。

5は深鉢の体部上半部から口縁部である。磨消縄文が施されている。口唇部は平らに調整されている。外面は口縁部付近が煤けている。胎土には径1～2mmの砂礫が含まれている。6は深鉢の体部片である。5本の施文具で沈線が施されている。外面は一部、内面は全面が煤けており、内面には炭化物が付着している。胎土には径1～3mmの砂礫が含まれている。7は深鉢の底部から体部下半部で、底部から外傾しながら立ち上がっている。内外面ともに煤けており、内面には炭化物が付着している。胎土には径1～5mmの砂礫が含まれている。8、9は壺の頸部から口縁部である。8は頸部から大きく外反し口縁部に至り、口唇部は肥厚し、平らに調整されている。磨消縄文が施され、磨消部には直径約2cmの穴が穿たれている。外面は口縁部付近が煤けている。9は沈線による文様が施されている。10は壺型土器の把手である。胎土には径1～3mmの砂礫が含まれている。いずれも後期前葉と考えられる。

Ⅲ群土器（写真図版 7）

縄文時代晩期の土器群である。11は深鉢の口縁部である。頸部から緩く外反し口唇部に至り、口唇部は丸く調整されている。頸部には沈線が1本巡っている。12～14は深鉢の体部片である。いずれも外面が煤けている。14には指紋が残っている。

Ⅳ群土器（写真図版 7）

縄文時代の土器であるが、時期が不明であるものを一括した。

15～17は深鉢の体部片である。15は内面が煤けている。16、17は胎土には径1～2mmの砂礫が多量に含まれ、金雲母も含まれている。この3点はいずれも朱塗りである。18～20は深鉢の底部である。19、20は底部が外方へ張り出している。18には木葉痕、19、20には網代痕が残っている。また、19は胎土に金雲母が含まれている。

V 群土器（写真図版 7）

弥生時代の土器群である。

21は甕の体部片である。内面が煤けている。22は坏の体部片と考えられる。2本の平行沈線の下に弧状の沈線が1本施されている。

弥生時代初頭と考えられる。

VI 群土器（写真図版 7）

古代に属する土器である。

23はロクロ不使用の坏の底部から体部下端である。内面は黒色処理されている。胎土には径1～2mmの砂礫が含まれている。

奈良時代と考えられる。

(2) 土製品

円盤状土製品、袖珍土器、土偶が出土している。

円盤状土製品（写真図版 7）

24～31の8点出土している。24と31は底部片を、他は体部片を使用して作られている。

袖珍土器（写真図版 7）

32は底部、33は台部と考えられる。尚、33は土偶の足の可能性もある。

土偶（写真図版 8）

34は足と考えられる。35は板状土偶の腕の部分と考えられる。直径2mm大の刺穴が施されている。36は腕の可能性もある。沈線を巡らし文様を施している。また一部煤けており、アスファルトが付着している部分もある。

(3) 石器

石器は石鏃、搔・削器類、不定形石器、打製石斧、磨製石斧、磨石、凹石、用途不明の石製品、石皿である。

石鏃（写真図版 8）

37、38の2点が出土している。37は有茎で、アスファルトが付着している。38は無茎で、基部には抉りが入っている。先端部は欠損している。

搔・削器類（写真図版 8）

不定型な剥片の縁辺に調整が施され、刃部が形成されているものである。39～42の4点が出土している。42は表裏両面からの調整、他は片面からの調整によって刃部が形成されている。

不定形石器（写真図版 8）

不定型な剥片の一部に調整が施され、刃部が形成されているものである。43～45の3点が出土している。い

ずれも片面からの調整によって刃部が形成されている。

打製石斧（写真図版 8）

46の1点が出土している。刃部が一部欠損している。

磨製石斧（写真図版 8）

47の1点が出土している。全面よく研磨され、刃部は両凸刃で円刃である。側縁には綾がみられる。

磨石（写真図版 8）

48、49の2点が出土している。48は横断面形は楕円形で、49は半分以上が欠損しているが、横断面形は楕円形だったと考えられる。

凹石（写真図版 8、9）

50～52の3点が出土している。横断面形は楕円形で、50、51には片面に1カ所、52には両面に2カ所ずつ使用痕が残っている。

石製品（写真図版 9）

53、54の2点が出土している。53は平面形が楕円形をした偏平な石の側縁の一部に、表裏両面から調整が施されている。54は包丁型をした石の側縁の一部に、表裏両面から調整が施されている。

石皿（写真図版 9）

55の1点が出土している。残存部分が少なく、全体の把握は難しい。

第3表 刈屋道の角遺跡出土石器一覧表

番号	器 種	出 土 地 点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)
2	石 鏃	A I e 9 配石	2.2	1.5	3	0.5
37	石 鏃	不 明	2.3	1.0	2.5	0.5
38	石 鏃	A I f 6 III～IV層	(2.1)	1.6	6	1.8
39	掻・削 器	A I f 6 III～IV層	5.9	2.8	8	12.8
40	掻・削 器	A I f 6 III～IV層	6	4.2	13	28.6
41	掻・削 器	A I e 6 III～IV層	4.9	3.5	1.5	25.9
42	掻・削 器	A I e 5 III層	3.8	4.8	12	13.5
43	不定形石器	A I e 8 III層	2.7	2.5	10	7.2
44	不定形石器	不 明	4.2	4.1	13	18.2
45	不定形石器	A I e 9 III層	5.1	4.8	8	21.4
46	打製石斧	A I e 6 III層	11.8	4.3	21	150
47	磨製石斧	A II e 0 III層	9.5	4.6	22	150
48	磨 石	A I d 5 III層	10	8	60	700
49	磨 石	不 明	(9.4)	(7.3)	(52)	410
50	凹 石	A I e 8 III層	8.8	7.5	56	560
51	凹 石	A II e 0 III層	13.3	7.7	38	580
52	凹 石	A I e 8 III層	13	5.9	38	480
53	石 製 品	A I e 5 III層	7.6	5.6	13	95
54	石 製 品	A I e 4 III層	26.5	11.4	31	670
55	石 皿	A I e 5 III層	(8.6)	(9.3)	(35)	280

V ま と め

調査の結果、土坑（22基）、配石遺構、焼土遺構（1基）が検出され、遺物は縄文土器、弥生土器、土製品、石器、土師器が出土した。ここでは、配石遺構と遺物について若干の補足をし、まとめたい。

本遺跡から配石遺構が検出されたが、閉伊川流域では同じ新里村腹帯に所在する腹帯配石遺構群に次いで2例目の検出となる。調査では、規則的な石の配置がみられたものは1カ所だけである。他については、集合、配置されているそれぞれの石の関係については把握できなかった。ただ、検出された土坑のほとんどには石が集合、配置されていることから、これら集合、配置されている石の中には、土坑と関係あるものがあると考えられる。そうすると、土坑の検出数はふえる可能性がある。尚、これらの土坑は墓壇と考えられる。

遺物は縄文土器、土製品、石器、弥生土器、土師器が出土している。特に、調査区域南側からの出土が多い。

縄文土器は、縄文時代中期末から後期初頭のものが多く出土しており、縄文時代晩期のものも少しであるが出土している。その中には、朱塗りされた土器、遺物の項では触れなかったが縄文時代晩期の注口土器も含まれている。

土製品は、円盤状土製品、袖珍土器、土偶が、石器は、石鏃、磨石、凹石などが出土している。

弥生土器は、甕、坏が出土している。弥生時代初頭と考えられる。

土師器は、坏が1点出土している。奈良時代と考えられる。

本遺跡は、配石遺構が検出されたこと、袖珍土器や朱塗り土器、それに土偶が出土したことから、祭祀に関係のある場所であったと考えられる。配石遺構は更に四方に広がっている可能性があり、配石遺構全体の把握と本遺跡の南側にある清水野遺跡との関係について、また、同時期の配石遺構が検出された腹帯配石遺構群との関連については、今後の調査に待つところである。

また、新里村内には奈良～平安時代の遺跡は登録されていないが、今回の調査で奈良時代の遺物が出土したことから、今後、村内で同時代の遺跡が発見される可能性もある。

—参考文献—

新里村教育委員会（1990）：「腹帯配石遺構群発掘調査概報 I」新里村文化財調査報告書第1集

新里村教育委員会（1991）：「腹帯配石遺構群発掘調査概報 II」新里村文化財調査報告書第2集

写真図版



近 景（北から）



基本土層（北から）

写真図版1 遺跡近景・基本土層



配石遺構全景（北から）



配石遺構全景（南から）

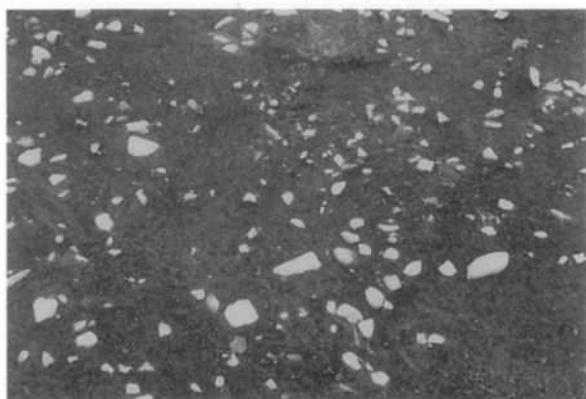
写真図版 2 配石遺構全景



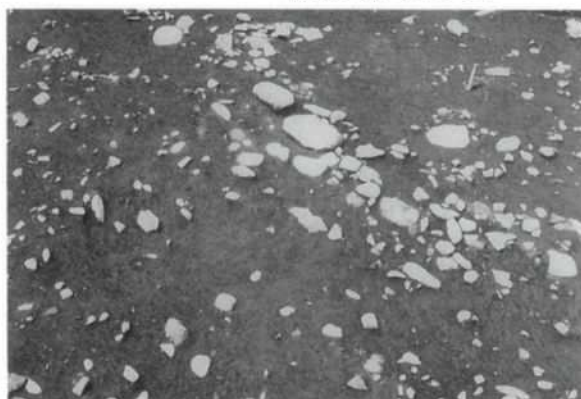
A I d 4 グリッド配石遺構（東から）



A I d 5 グリッド配石遺構（東から）



A I e 4 グリッド配石遺構（東から）



A I e 5 グリッド配石遺構（東から）



A I d 6 グリッド配石遺構（東から）



A I f 5・f 6 グリッド配石遺構（東から）



A I e 6 グリッド配石遺構（東から）

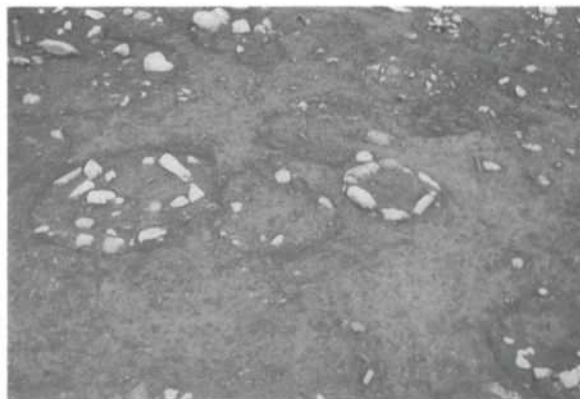


A I e 7 グリッド配石遺構（南から）

写真図版 3 グリッド毎配石遺構①



A I e 8 グリッド配石遺構（西から）



A I e 9 グリッド配石遺構（南から）



A II e 0 グリッド配石遺構（南から）



A I f 8 ~ A II e 0 グリッド配石遺構（北から）



A II e 0 ①・②土坑完掘全景（南から）
（左）A II e 0 ①土坑
（右）A II e 0 ②土坑



A II e 0 ①土坑断面（南から）

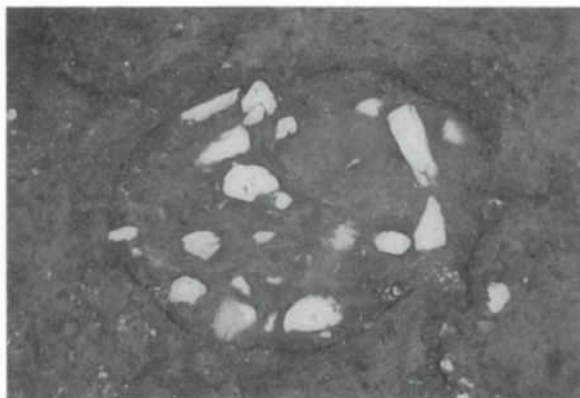


A II e 0 ②土坑断面（南東から）

写真図版 4 グリッド毎配石遺構②、A II e 0 ①・②土坑



完掘全景（南から）



平 面（南から）



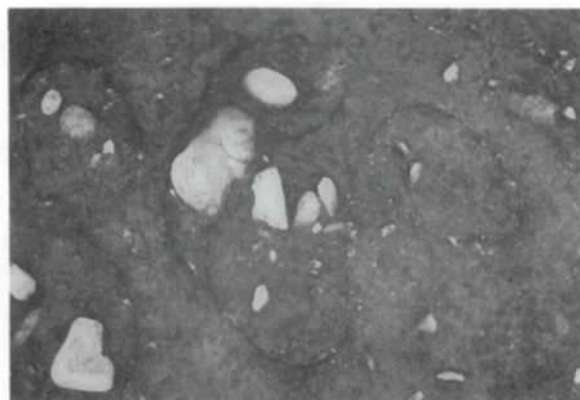
AIIe03土坑断面（南東から）



AIIe91土坑断面（南から）



AIIe93土坑平面（南から）



AIIe04・5土坑平面（南から）



AIIe95土坑平面（南から）



AIIe06・7・9土坑平面（南から）

写真図版5 AIIe03土坑、AIIe91土坑、AIIe93土坑、AIIe04・5土坑、AIIe95土坑、AIIe06・7・9土坑



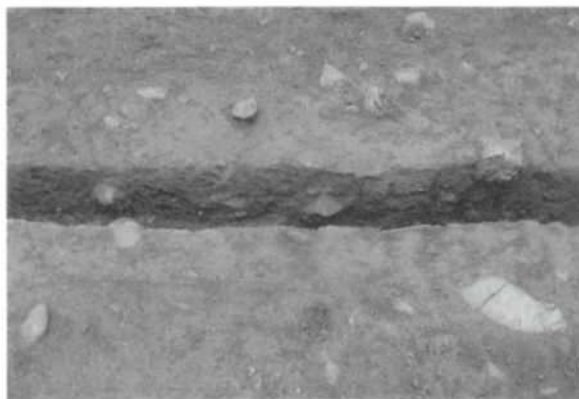
A I e 9 配石遺構平面（南から）



A I e 9 配石遺構断面（南西から）



A I e 8 焼土遺構平面（南から）

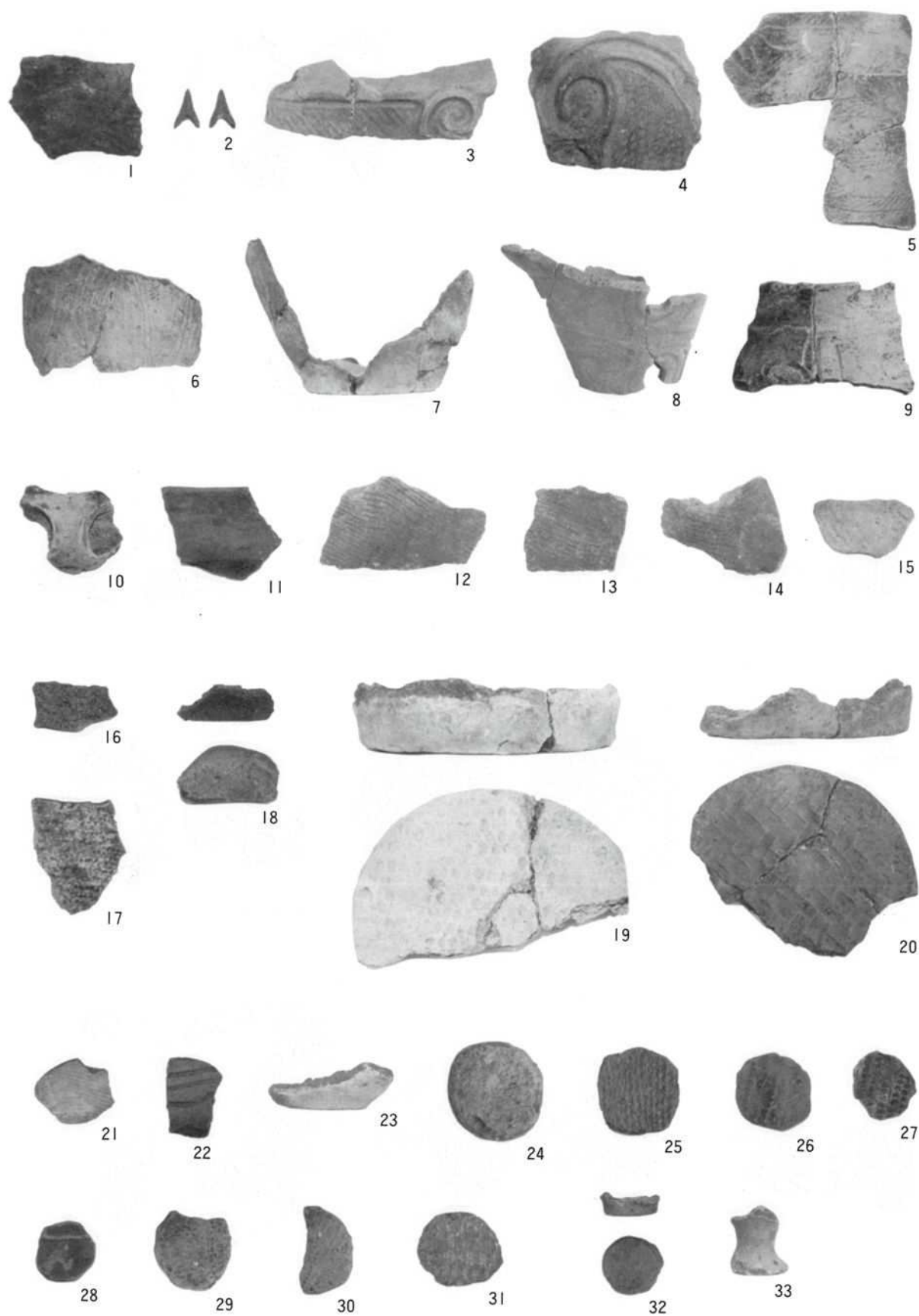


A I e 8 焼土遺構断面（南から）

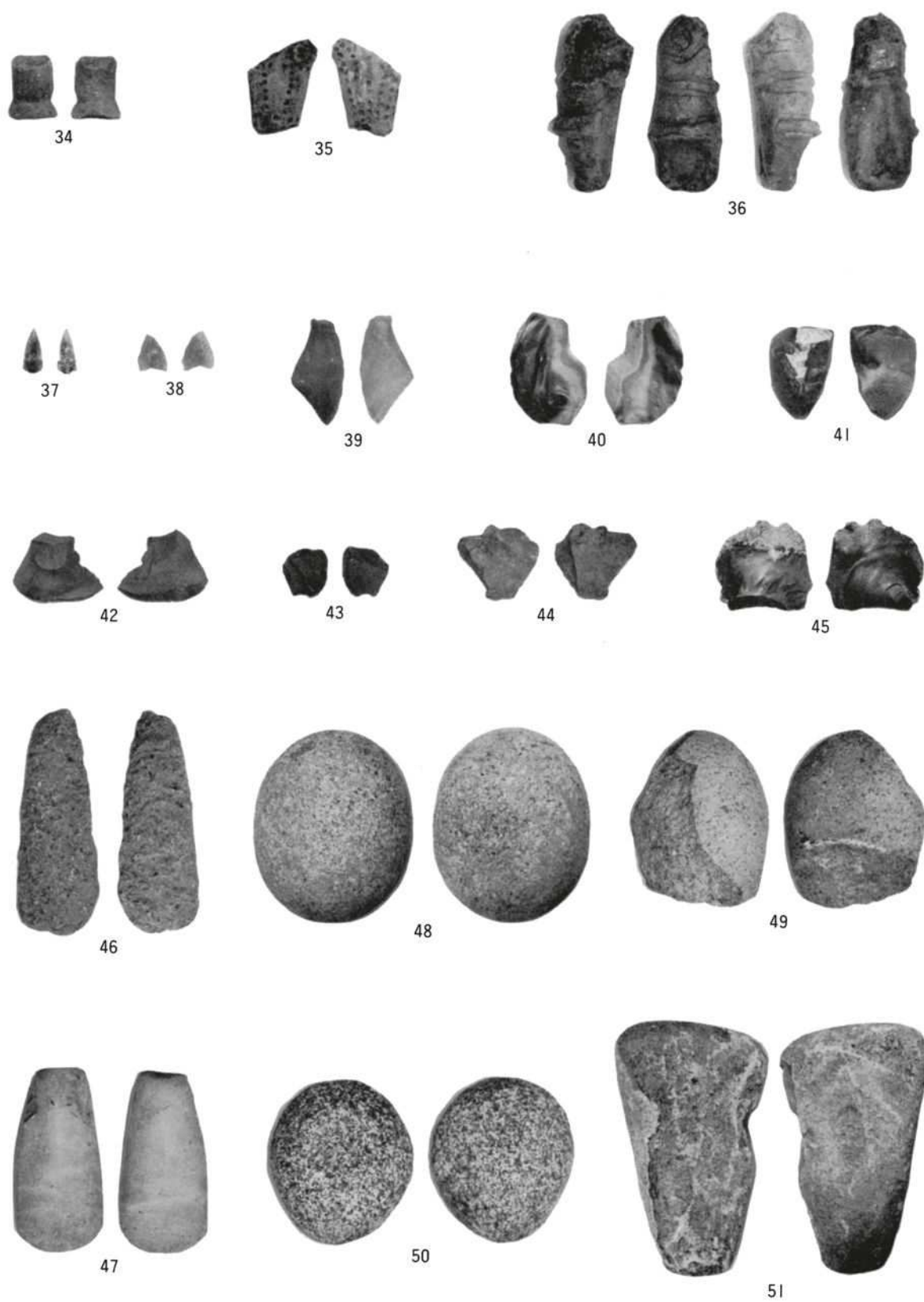


作業風景

写真図版 6 A I e 9 配石遺構、A I e 8 焼土遺構、作業風景



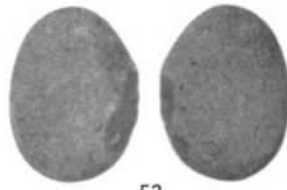
写真図版 7 出土遺物(1)



写真図版 8 出土遺物(2)



52



53



55



54

写真図版 9 出土遺物(3)

新里村文化財調査報告書第3集

刈屋道の角遺跡発掘調査報告書

1997年3月25日 発行

発行 新里村教育委員会

岩手県下閉伊郡新里村大字茂市2-112-1

〒028-21 TEL 0193 (72) 2111(代) FAX 0193 (72) 3282

印刷 花坂印刷工業株式会社

岩手県宮古市新川町1-2

〒027 TEL 0193 (62) 3125(代) FAX 0193 (64) 0094
